

つばき  
椿 遺 跡

2010

財団法人 山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、一般国道191号改築(萩・三隅道路)工事に伴い、国土交通省中国地方整備局から委託を受け、山口県ひとづくり財団が実施した、萩市椿に所在する椿遺跡発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、平安時代の遺物堆積層や、近世寺院の跡地を検出することができ、当地域の歴史を知るうえで貴重な成果をおさめることができました。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育ならびに学術研究や郷土史理解の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、当発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 山口県ひとづくり財団  
理事長 西村 亘

## 例 言

- 1 本書は平成21年度に実施した、椿遺跡（山口県萩市椿地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、一般国道191号改築（萩・三隅道路）工事に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が国土交通省中国地方整備局山口河川国道事務所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体 財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター  
調査担当 主任調査研究員 小南 裕一  
文化財専門員 高木 英明  
調 査 員 山田 圭子
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、萩市教育委員会、国土交通省中国地方整備局萩国道出張所ならびに地元関係各位から、協力・援助を得た。
- 5 本書の図1は、国土地理院発行の5万分の1地形図「萩」を複製使用した。図2は、国土交通省中国地方整備局から提供された地形図を元に作成した。
- 6 本書で使用した方位は、遺構配置図に関しては国土座標（世界測地系）の北で示し、個別遺構に関しては磁北で示している。また、標高は海拔高度（m）である。
- 7 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 8 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 9 本書で使用した遺構略号は、次の通りである。

S K：土坑      S P：柱穴
- 10 墨書土器の判読については、山口大学人文学部 橋本義則教授の御教示を得た。
- 11 本書の作成・執筆は、小南・高木・山田が共同で行い、編集は小南が行った。

## 本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	調査の成果	8
1	A・B地区の調査成果	8
2	C地区の調査成果	12
3	D地区の調査成果	15
IV	まとめ	27

## 挿図目次

図1	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	2
図2	試掘調査時出土土器	3
図3	調査区設定図	3
図4	A・B地区全体図	5
図5	C地区全体図	6
図6	D地区全体図	7
図7	A・B地区土層図	9
図8	A・B地区出土遺物(1)	10
図9	A・B地区出土遺物(2)	11
図10	C地区遺構密集地区	12
図11	C地区基本土層図	13
図12	SK2実測図	13
図13	C地区出土遺物	14
図14	D地区石列実測図	15
図15	D地区出土遺物(1)	16
図16	D地区出土遺物(2)	17
図17	D地区出土遺物(3)	18
図18	D地区出土遺物(4)	19
図19	D地区採集経石(1)	20
図20	D地区採集経石(2)	21
図21	D地区採集経石(3)	22
図22	D地区採集経石(4)	23
図23	D地区採集経石(5)	24
図24	D地区採集経石(6)	25
図25	橋周辺と「禅宗福昌寺」	27

# 表目次

経石一覧表・・ 26

## 図版目次

- |       |               |       |               |
|-------|---------------|-------|---------------|
| 図版 1  | 調査区遠景         | 図版 13 | C地区SK 1完掘状況   |
| 図版 2  | A地区完掘状況       |       | C地区丘陵部完掘状況    |
|       | B地区土層ベルト設置状況  | 図版 14 | D地区全景         |
| 図版 3  | B地区トレンチ東壁土層断面 | 図版 15 | D地区近景         |
|       | B地区南壁土層断面     |       | D地区南西部        |
| 図版 4  | B地区土器出土状況①    | 図版 16 | D地区土器出土状況     |
|       | B地区土器出土状況②    |       | D地区瓦溜り1遺物出土状況 |
|       | B地区土器出土状況③    | 図版 17 | D地区瓦溜り2遺物出土状況 |
|       | B地区土器出土状況④    |       | D地区近世石列検出状況   |
| 図版 5  | B地区土器出土状況⑤    | 図版 18 | 出土遺物①         |
|       | B地区土器出土状況⑥    | 図版 19 | 出土遺物②         |
|       | B地区土器出土状況⑦    | 図版 20 | 出土遺物③         |
|       | B地区土器出土状況⑧    | 図版 21 | 出土遺物④         |
| 図版 6  | B地区完掘状況①      | 図版 22 | 出土遺物⑤         |
|       | B地区完掘状況②      | 図版 23 | 出土遺物⑥         |
| 図版 7  | C地区遠景         | 図版 24 | 出土遺物⑦         |
| 図版 8  | C地区近景         | 図版 25 | 出土遺物⑧         |
| 図版 9  | C地区全景         | 図版 26 | 採集経石①         |
| 図版 10 | C地区北東部        | 図版 27 | 採集経石②         |
|       | C地区近景         | 図版 28 | 採集経石③         |
| 図版 11 | C地区遺構密集地区     | 図版 29 | 採集経石④         |
|       | C地区東壁土層断面     | 図版 30 | 採集経石⑤         |
| 図版 12 | C地区SK 2土器出土状況 |       |               |
|       | C地区SK 2完掘状況   |       |               |

# I 遺跡の位置と環境

## 1 地理的環境

椿遺跡は、萩市椿に所在する。現在の萩市の中心部である約15km<sup>2</sup>の三角州を主とする低地は、山口市阿東町嘉年の物見ヶ岳西麓を源流とする防長第2の大河である阿武川が、河口付近で東の松本川、西の橋本川に分流することによって形成される。この川内の南方、すなわち東南に南明寺山、西に茶白山・三角山などの300m級の山々に囲まれ、阿武川とその支流の橋本川左岸の沖積地並びに阿武川に注ぎ込む大屋川が形成した扇状地一帯に立地するのが大字としての椿地区であり、さらには椿八幡宮よりほぼ東側に分布する集落一帯が小字椿と呼称されている。

## 2 歴史的環境

現在の萩市街地の礎として川内地区が発展したのは、1600年の関ヶ原の戦いで敗れた毛利輝元が萩の地に開府し、計画的な城下町造りに着手して以降のことである。それまでは、豪雨毎の阿武川の氾濫による甚大な被害のため、高い防護堤防が築かれて住居基盤が整うまでは、人の住む地としての環境は十分に熟してなかった。もっとも、現在のデルタ地形そのものが現在の広さまでに形成されたのは地質学的には奈良時代以降と考えられており、また平素から湿潤の地であったため、古代の人々の生活痕跡がほとんど見られないのも当然であると受け止められていた。しかし、平成11年度(1999年度)に当センターが萩城跡外堀地区の発掘調査を行った際、地表から約1m下の砂層から弥生時代中期の壺の破片2点とほぼ完形の壺1点、計3点の遺物が出土した。このことをもって、弥生時代にすでにデルタ地帯において人々の定住があったと断定するのは早計であるが、砂丘上に墓地が存在した可能性はある。一方、デルタを取り囲む周辺の山麓では、農耕文化を携えた弥生時代の人々が定住生活を始めていた痕跡を確認できる。特に椿地区には、弥生時代の霧口遺跡(図1-30)・椿遺跡(同-1)が所在しており、いずれも土器や石器の出土により、人々が阿武川の氾濫を避けて谷頭の湧水を利用して農耕生活を営んでいたことが窺える。

霧口遺跡の所在する南明寺山の北麓、小字迫の内周辺からは、幕末時には既に弥生土器の発見が報じられており、昭和2年にはほぼ完形の弥生時代中期の壺が出土した。近年では弥生時代の土器片や磨製石斧も採集されている。椿遺跡においても、椿八幡宮周辺の畑地から弥生土器・土師器・須恵器の破片が採集されている。大字椿の西端である青海地区においても同様の破片や石鏃・石斧が採集されており、椿地区山麓一帯には弥生時代以降、相当数の集落が広がっていたことが容易に想像できる。

椿地区は、平安時代には「和名抄」に記される長門国阿武郡八郷の1つ「椿木郷」の一角を担い、後に近衛家の荘園「牛牧荘」の一部に組み入れられた。中世鎌倉期からは「椿郷」の一部となり、正和3年(1314年)には、地頭三善康久が椿八幡宮を現在の地に移したとされる。そして江戸時代中期には、椿郷は椿東分村、椿西分村として分村し、現在の椿地区が含まれる椿西分村は当島宰制に属することとなる。防長風土注進案によると、幕末頃、佐波郡三田尻に至る往還道沿いの大屋市には瓦屋根12軒茅葺11軒の家が立ち並び、内訳は商人18軒・職人5軒で旅人相手に賑わったほか、口屋も置かれて通行人の取り締まりも行っていたという。また、濁淵には萩と赤間関を結ぶ赤間関街道の3ルートの中で、阿武郡・大津郡・豊浦郡を伝う中道筋の起点となった一里塚があった。

<引用・参考文献>

萩市編集委員会『萩市史第1巻』1983年 『萩市史第2巻』1989年 『萩市史第3巻』1987年  
 萩市『続・田中助一先生遺稿集-萩の郷土史雑話-』2002年  
 山本博『古代の萩 第1部 先史時代の萩』1972年  
 下中邦彦『日本歴史地名体系第36巻 山口県の地名』1980年  
 山口県歴史文化財センター『萩城跡(外堀)Ⅲ』2006年



図1 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

## Ⅱ 調査の経緯と概要

一般国道191号改築（萩・三隅道路）工事に伴い、国土交通省中国地方整備局山口河川国道事務所から、路線予定地内の埋蔵文化財有無についての照会があり、山口県教育委員会は平成20年度に対象地の試掘調査を行った。工事対象地は周知の遺跡である椿遺跡の所在地であり、試掘調査の結果、古代の須恵器が含まれる包含層などが検出されたため、県教育委員会は本調査が必要である旨を回答した。この結果を受け、国土交通省中国地方整備局山口河川国道事務所は、財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターに発掘調査を委託し、平成21年度に業務を実施することとなった。

発掘調査は工事計画の都合により、Ⅱ期に分けて実施することとなり、まず4月21日よりⅠ期の調査に入った。Ⅰ期の調査対象地はA地区と命名され、約700㎡の発掘調査を行った結果、古代の須恵器を含む包含層を検出した。しかし、遺構は確認されず、遺物の出土量もそれほど多くはなかったため、5月11日には調査を終了することができた。

Ⅱ期の発掘調査は、9月1日より開始した。調査対象地はA地区に南接するB地区と、道路を隔てた西側丘陵部に位置するC地区であり、まずB地区の調査から着手した。B地区はA地区同様、遺構は確認されず、遺物包含層の調査に終始したが、出土遺物の量はA地区よりも多く、遺物の集中箇所も認められた。このB地区の調査と並行して、10月1日よりC地区の表土除去作業に入ったが、この地区は工場

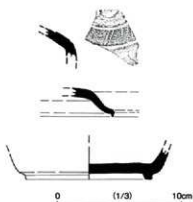


図2 試掘調査時出土土器

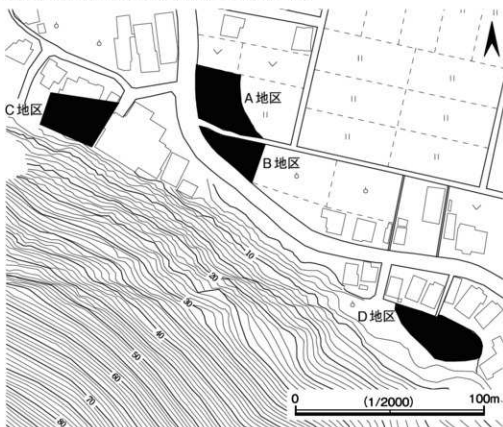


図3 調査区設定図



建物の直下であったため、平成20年度の試掘時には十分なトレンチ調査ができず、遺構の密度や広がりをも十分に把握することができていなかった。そこで、工場建物の基礎部分撤去後に重機を使って試掘を行った結果、調査範囲の大部分に客土が認められ、遺構や遺物包含層が存在する箇所も非常に限定された範囲であることが判明した。そこでC地区に関しては、当初予定していた約2800㎡の調査対象範囲を約580㎡に縮小して本調査を実施することとなったが、同時に調査対象地として旧福昌寺関連施設の跡地がD地区として新たに追加され、委託契約の変更を行うこととなった。



調査風景



表土除去



空中写真撮影

C地区の本格的な掘り込みは、B地区の調査がほぼ終了した10月下旬から開始したが、この調査区内でも客土が多く、遺構や遺物包含層の検出に困難を極めた。しかし北東隅において、土坑、柱穴の密集地区が存在することが判明し、古墳時代の遺構・遺物などを検出することができた。こうした遺構等の掘り込みが終了したのち、11月20日に空中写真撮影を実施し、その後、だめ押しのトレンチ掘り込みや、遺構図面作成をおこなって12月1日には全ての作業を終了した。

D地区の調査面積は、約620㎡であり、11月26日から表土除去を行い、本格的な調査に入った。遺構としては、建物の石列や、土坑、瓦溜りなどが検出されたが、分布密度は薄く、調査の進行は順調であった。遺物としては主に19世紀以降の陶磁器、瓦類などが出土したが、近代以降の遺物も混在しており、その多くが、昭和前半代に建物を撤去した際、まとめて廃棄されたものと考えられる。D地区については12月14日に空中写真撮影を実施し、その後、だめ押しのトレンチ掘り込み、遺構図面作成を行い、12月16日には全ての作業を終了した。

現地作業終了後、すみやかに現場を国土交通省の担当者に引渡し、以後、山口県埋蔵文化財センターにて、調査資料の整理、出土遺物の復元・図化・写真撮影等を行い、この報告書を刊行するに至った。

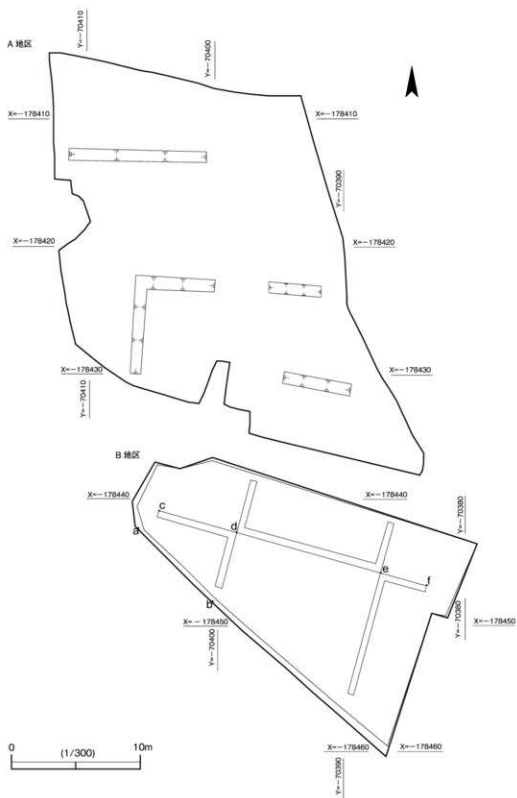


图4 A·B地区全体图

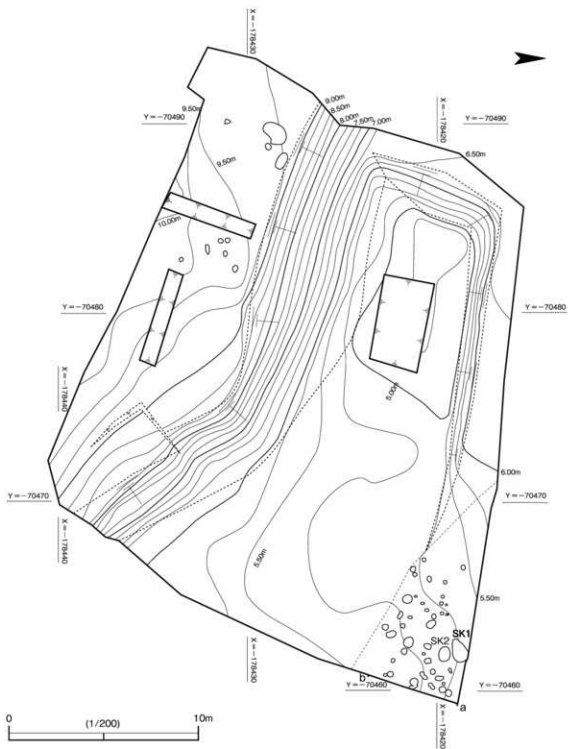


图5 C地区全体图

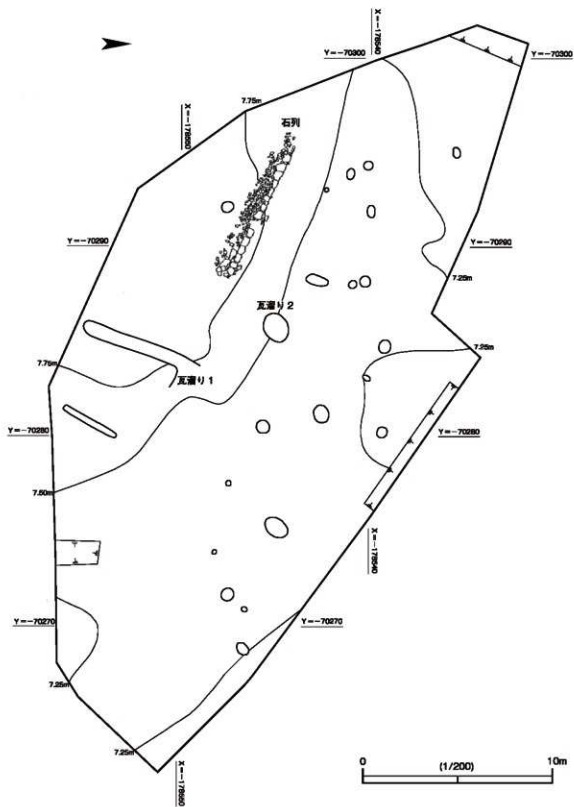


図6 D地区全体図

### Ⅲ 調査の成果

#### 1 A・B地区の調査成果

##### (1) 基本層序 (図7)

A・Bは隣接する調査区であり、いずれも沖積地上に立地している。明確な遺構は存在せず、遺物包含層のみが検出された。現地表面からの層序を確認すると (図7下段)、まず1層は道路舗装のための客土であり、2層は水田耕作土であると考えられる。以下は粘質土もしくはシルト質の堆積土であり、9層までは遺物をほとんど含まない。10層は褐灰色の粘質土で、主に古代の須恵器を含む遺物包含層であり、特に土層の下部に遺物が多く含まれている。11層は灰色の砂礫層であり、河川の氾濫原であったことが推定できる。11層以下は砂礫層と粘土層の互層となっており、流水と滞水の繰り返しであったことが看取できる。なお、11層以下については、複数箇所深掘りのトレンチを設定し、掘り下げたが遺物は確認されなかった。

##### (2) 出土遺物 (図8-9)

1・2は弥生土器である。1は前期末～中期初頭の壺胴部片であり、突帯の上部に縦方向の羽状文が施されている。2は甕底部で、凹底の形態を呈しており、中期の所産であると考えられる。

3・4は古墳時代の土師器である。3は高坏の脚部で穿孔されているが、1箇所のみ貫通していない。4は瓶の把手であると考えられるが、残存状況は不良である。

5～45は須恵器である。5は長頸壺頸部であり、ほぼ中に二条の沈線を施している。6は小型壺もしくは甕の底～胴部下半の資料であると考えられるが確証はない。7・8は壺口縁部片であり、7には波状文が施されている。9は長頸壺の頸部片と考えられ、胴部との接合箇所付近の外面に沈線が巡らされている。10は須恵器盤であり、自然釉が部分的に認められる。11は坏底部と考えられ、外底面には回転糸切りの痕跡が残存している。10・11に関しては、後述する須恵器坏身・坏蓋よりも新しい年代に位置づけられるものであろう。

12～22は須恵器坏蓋である。12～15はつまみ部であり、いずれも扁平なボタン状の形態を呈する。16はつまみ部分が欠落する蓋の天井部であり、顕著な回転ヘラケズリ痕が認められる。17～20・21はいずれも口縁端部が鳥嘴状を呈し、19・20・22は環状のつまみが付されている。また20は内面に「大」の墨書が認められる。21については、環状つまみの部分が意図的に打ち欠かれており、廃棄のさい、何らかの祭祀的行為が行われたものとみられる。23～40は坏身であり、23～29はほぼ全形がうかがえる資料である。24は復元口径が9.4cmと小型であるが、そのほかのものは、口径約13～15cmを測る。形態は口縁部が若干外反するもの(25・26・28)と底部から口縁部まで直線的に立ち上がるもの(27・29)の両者が認められる。なお、27は外面に赤色顔料を塗布している。30～40は底部高台のみが残存したもので、高台の形状が外側へ強く張り出すもの(31・33・37・38)と、直立気味のもの(30・34・36・40)に大別することができる。また、40・41の外底面には墨書が施されており、41は「足」と書かれている可能性がある。

42・43は須恵器甕で、42は大甕の底部付近、43は甕胴部片で外面の一部に墨書が認められる。44・45は壺胴部であると考えられる。

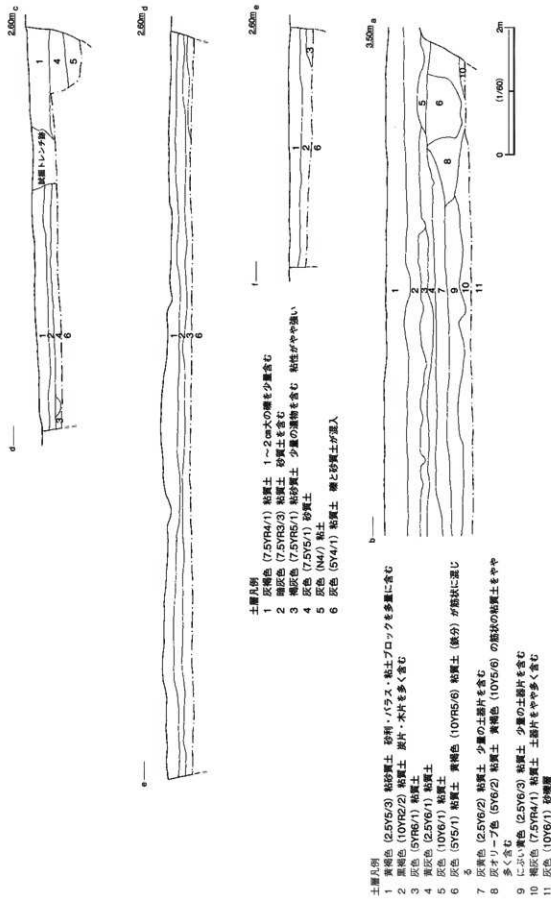


図7 A・B地区土層図

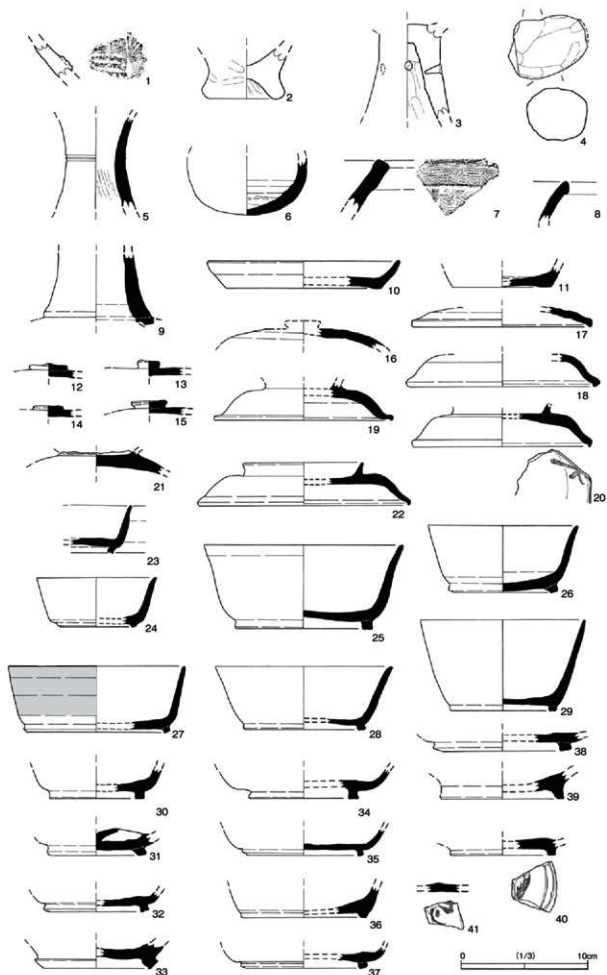


图8 A·B地区出土遺物(1)

46・47は中世の土師器で、46は坏、47は埴である。いずれも外底部に回転糸切り痕が認められる。  
 48～51は中世の青白磁で、48は菊蓮弁をもつ青磁碗、50は内底面に片切り彫りによる蓮華文をもつ青磁碗である。49・51は白磁で、51は玉縁状の口縁を呈する。

52・53は近世の陶磁器である。52は皿で、外面は口縁部付近まで施釉し、内面には格子目状の文様が認められる。53は大型の鉢で、全面に灰オリーブ色の釉が施されている。

54は土錘で土師質。55は緑色チャート製の火打石で、側縁部にツブレ痕跡が認められる。56は石製模造鏡で、直径3.6cmを測る。滑石製である。

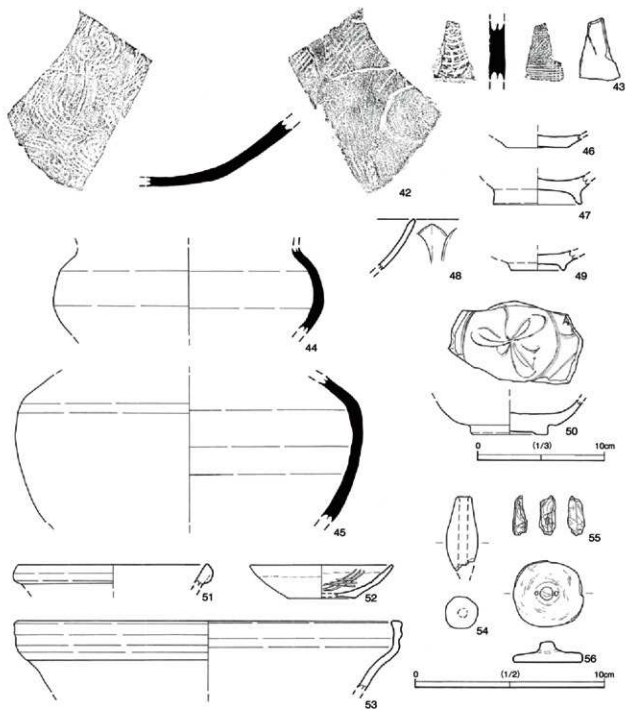


図9 A・B地区出土遺物(2)



## 2 C地区の調査成果

### (1) 調査区の概要と遺構

C地区は調査区南側の丘陵部分から北側へむかってなだらかに傾斜する地形を当初想定していたが、表土除去の結果、調査区中央部で地山が急激に落ち込む状況が確認され、この部分に相当量の客土が為されていることが判明した。この客土には遺物が含まれていないため、時期の特定は困難であるが、土質から考えて、それほど古い時期のものではないと判断している。この急激な地山の沈下が、そのまま北側まで続いているのか、それとも再び上昇し、部分的な谷状を呈する地形になるのかは、調査区北西側における調査所見では判断できないが、調査区北東隅で検出された遺構面が地山沈下部のレベルよりも高いことを考慮すれば、後者の可能性、すなわち谷状にえぐられた地形を想定することができる。こうした地形が形成された要因が、人為的なものなのか、自然の営為によるものなのか断定できないが、常識的な土地利用のありかたから考えれば、後者の可能性が高いと考えられる。

また、南側の最も標高が高い丘陵の平坦部では、土坑や柱穴と考えられる遺構が数基確認されたが、残存状況は不良で、遺物もほとんど検出されなかった。この箇所は、後世の削平によって平坦面を形成しているが、本来の地形は斜面であり、生活面として利用されることは基本的にはなかったものと考えられる。

C地区に関しては、先述したように遺構の分布範囲が、調査区北東隅にほぼ限定されている。このエリアからは土坑や柱穴が確認され、古墳時代や中世の遺物が検出された(図10)。柱穴については、径60cm程度で、根石をもつものなどがあり、掘立柱建物の一部と考えられるが、全体を把握するまでには至っていない。土坑については、2基確認し、このうちSK2と命名した土坑について個別に解説する。

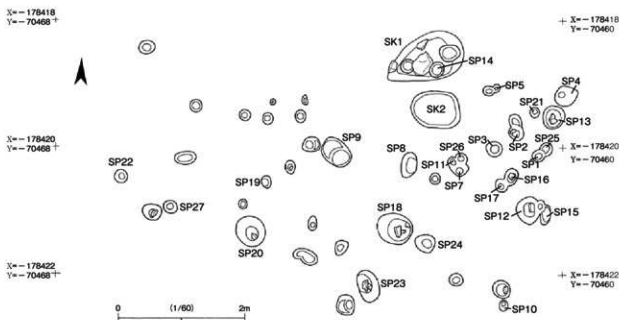


図10 C地区遺構密集地区

なお、この遺構密集地区の壁面で土層図を作成しており、これについて解説したい(図11)。まず1~3層は客土であり、地表面から約90cmの深さまで堆積している。4層以下にはわずかながら遺物が包含されており、柱穴や土坑などの遺構は灰褐色粘質土である12層を切り込んでいる。よって12層が遺構面であり、その上部に堆積している4層以下は遺物包含層ということになるが、こうした堆積状況は、このエリアのみに限定して認められる。本来はこうした堆積状況が、調査区下段の広い範囲に存在していたものと考えられるが、上記したような大規模な攪乱によって消失してしまったものと考えられる。

**SK2 (図12)** 平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸75cm、短軸60cm、深さ約40cmを測る。検出面から約20cmの深さで、礫や土器類が検出され、廃棄土坑としての性格が考えられる。時期は出土土器から古墳時代後期に比定できる。

## (2) 出土遺物 (図13)

57は弥生土器の寛底部と考えられる。色調は橙色を呈し、器面調整は磨滅のため不明。トレンチ掘削時に出土した。58もトレンチ掘削時に出土した土師器ミニチュア土器の底部で、外面に指押さえの痕跡が明瞭に認められる。59は土師器高坏で、復元口径19.8cmを測る。内外面とも磨滅が著しく、調整不明瞭。斜面清掃時に出土した。

60-63がSK2から出土した遺物である。60は土師器高坏脚部で、内面には接合痕や絞り痕が明瞭に認められる。底径11.8cm、残存高6.0cmを測る。63は台付鉢と考えられるが、磨滅が著しく、調整等不明。底端部は磨滅のため、明確に接地面であるか断定が難しい。復元底径5.8cmを測る。60・63はいずれも古墳時代後期に位置づけられよう。

61はSP14から出土した須恵器杯蓋である。天井部付近には回転ヘラケズリの痕跡が明瞭に認められる。62は土師器杯の底部で、復元底径4.6cmを測る。外底面は回転糸切りのちナデ。トレンチ掘削時に出土した。64は中世瓦質土器の鍋でSP22より出土。内外面ともに磨滅しているが、内面には横

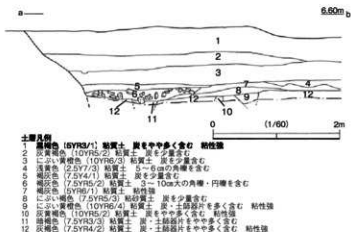


図11 C地区基本土層図

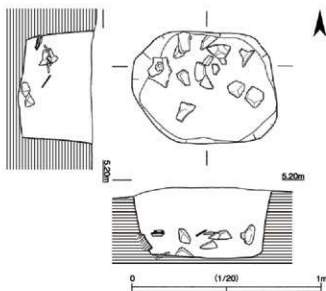


図12 SK2実測図

方向の刷毛目調整痕が認められる。65は近世瓦質土器の火鉢で、復元口径32.4cmを測り、内面には刷毛目調整痕が顕著に残る。

66～68は中世の陶磁器。66・67は青磁碗で、内面には片切り彫りの蓮花文などがみとめられる。68は白磁碗で、口縁部が玉縁状に形成される。69は近世の紅皿で、内外面ともに施軸されており、口径2.6cmを測る。70は陶器播鉢で、内面には卸目が密に施されている。また、外底部には窯印と考えられるノミ痕が認められる。

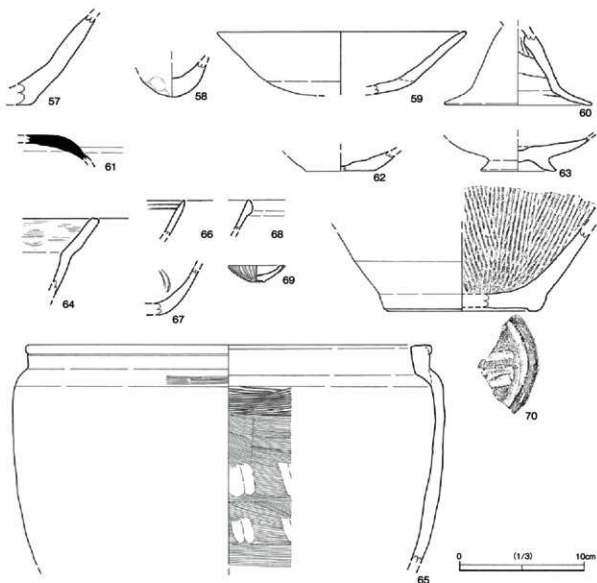


図13 C地区出土遺物

### 3 D地区の調査成果

#### (1) 調査区の概要と遺構

D地区はC地区から約150m南東側の丘陵端部に位置する。この調査区は、17世紀後半に造営された福昌寺（廃寺の時期不詳）の関連施設が置かれていた場所と考えられ、調査前に大量の経石が採集されていた。地元住民の話によれば、昭和前半代までは家屋が存在したが撤去され、現在に至っているとのことであった。

調査区は、ほぼ平坦な地形であり、試掘調査の結果、建物基礎と考えられる石列などが検出されていた。本調査に入り、表土除去を行った結果、この石列以外に溝や土坑などの遺構が確認されたが、出土する遺物は19世紀後半以降のものが主体で、近代の遺物も混入している。

石列は全長約8mを測り、北東側に面を描え、大ぶりの石を置き、その背後に小礫を充填している（図14）。この石列を境として、南側は1段高くなっており、地山削り出しによる造成が行われていることが看取できる。しかし、共存する遺物が存在しないため、構築時期については明らかにしがたい。このほか、近世瓦がまとも出土した瓦溜りや、遺物が全く出土しない土坑などが認められるが、大部分が19世紀後半以降の所産と考えられる。

#### (2) 出土遺物（図15～18）

71は須恵器坏身の高台部であり、古代の遺物としては唯一のものである。72～80は近世の陶磁器である。72は萩焼で、外底面に墨書が施されている。73は瓦質焜埴片で、外面は黒く燻されており「管俊」の刻印が認められる。74は京・信楽系の陶器であり、瓦溜り2より出土した。75～78は肥前産の磁器。

81は碁石、82は緑色チャートの火打石である。また、83は青銅製の不明製品で、所属時期も不詳。84は寛永通宝で、全体の約半分が欠損している。

85～100は近世瓦で、85・87・88・96・97・99・100は瓦溜り1、86・90・91・93～95・98は瓦溜り2から出土したものである。85・86は軒丸瓦の瓦当部で、86の文様構成は、12珠文の左三巴文である。87～89は軒平瓦の瓦当部で、88はいわゆる赤瓦の石州産。いずれも唐草文が表出されている。90～92は丸瓦で、90・91は内面にコビキ痕と布目圧痕が認められる。93～98は棧瓦で、95は内面に条線が認められる。99は角杖伏間瓦で、石州産。100は外面に刻線が認められ、飾り瓦の可能性がある。

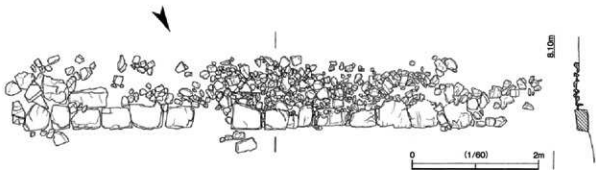


図14 D地区石列実測図

### (3) 採集経石 (図19～24)

D地区では、調査前の踏査・試掘で、経石が集積する箇所が地表面で確認され、このことが本調査に至るきっかけとなった。これらの経石は、文化五年(1808)に福昌寺関連地に埋納されたものが、その後攪乱され、耕土およびその直下層に集積されたものと考えられる。

経石は試掘調査時に727個採集され、本調査で10個出土している。採集された箇所は、調査区中央の北端付近である。いずれも地表に上がって風雨に曝された時期があったようで墨書の遺存は悪く、わずかな痕跡を残すのみの石が多かった。本報告書では判読可能であった80個を掲載する。

101～138は1個の石に1字のみを記す一字一石経である。石の大きさは109が最も大きく、長さ8.2、幅6.3、厚さ4.7cmで「薩」の字を記している。最も小さいものは117で、長さ3cm、幅2.6cm、厚さ2.1cmで「十」の字を記している。

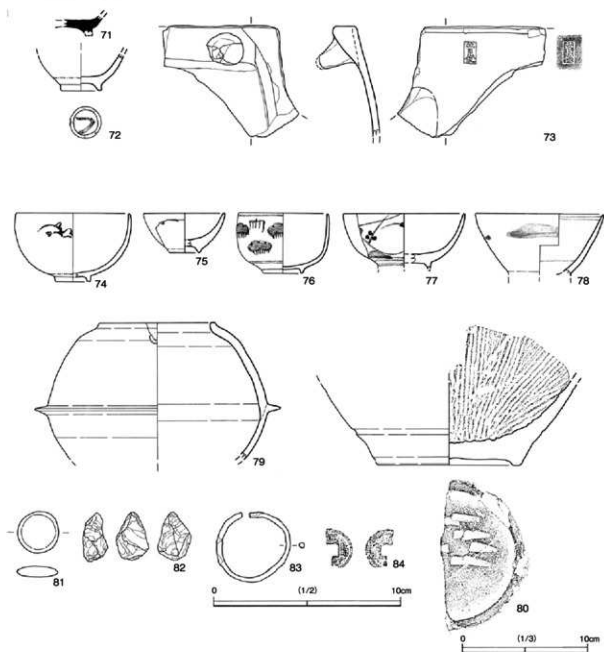


図15 D地区出土遺物(1)

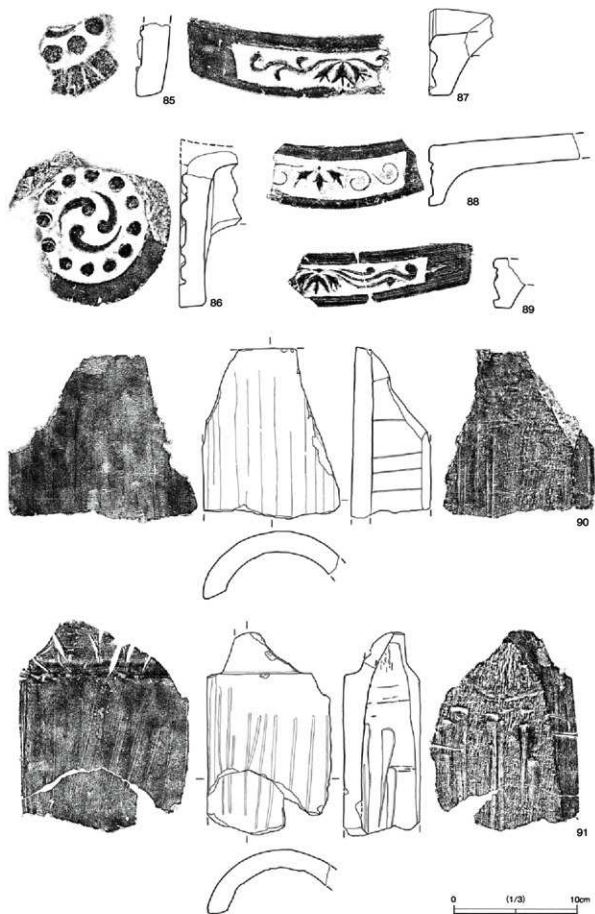


图16 D地区出土遗物(2)

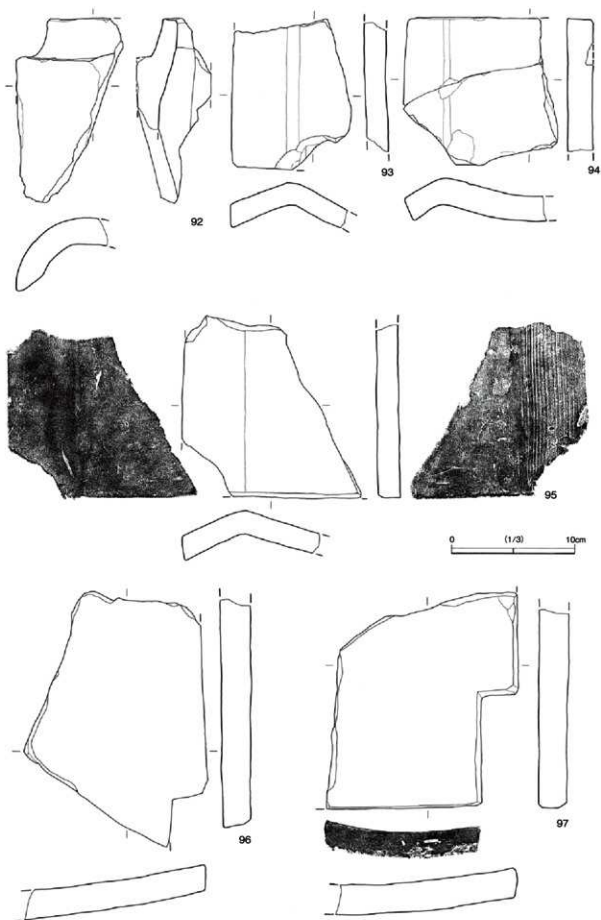


图17 D地区出土遗物(3)

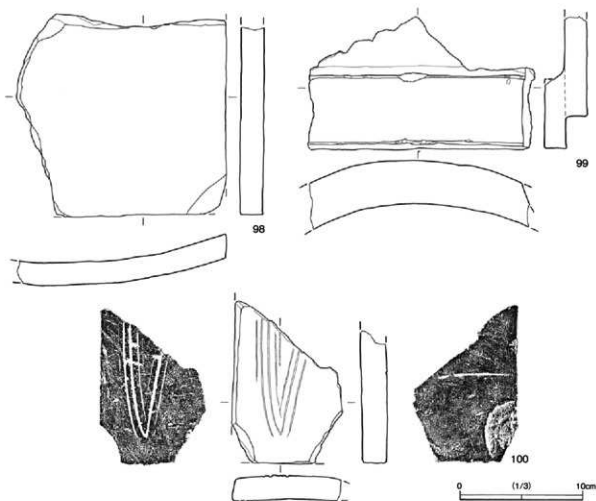


図18 D地区出土遺物(4)

139～180は1個の石に2字以上を記す多字一石経である。154は長さ5cm、幅2.7cm、厚さ1.7cmの石に「法華」、裏面に「経」と記され、155は長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ1.8cmの石に三面にわたって「妙法・蓮・華経」と記されている。これによって出土した経石には「妙法蓮華経」が書写されていたことがわかる。さらに158～163には序品の経文が記され、164・165には方便品、166～172には譬喩品、173～175には提婆達多品、176には安樂行品、177には従地涌出品、178には分別功德品、179には観世音菩薩普門品の経文が記されていた。180には「南無阿弥陀佛」と漢字で書かれた後にカタカナの文字が続くが、判読不可能であった。これらの石はすべて河原石で花崗岩がほとんどを占める。書写は筆跡の違いから10名以上の人物によるものと思われる。



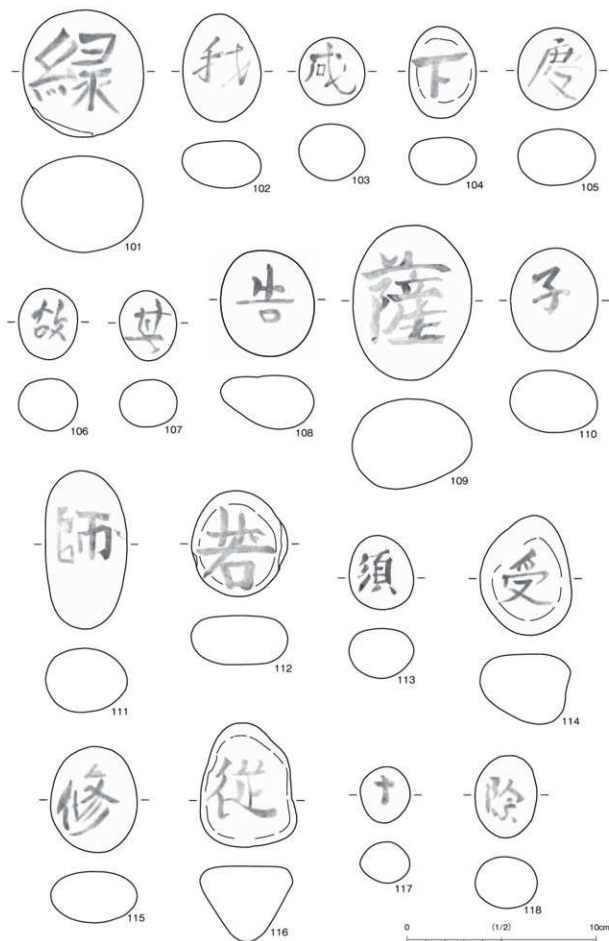


图19 D地区採集經石(1)

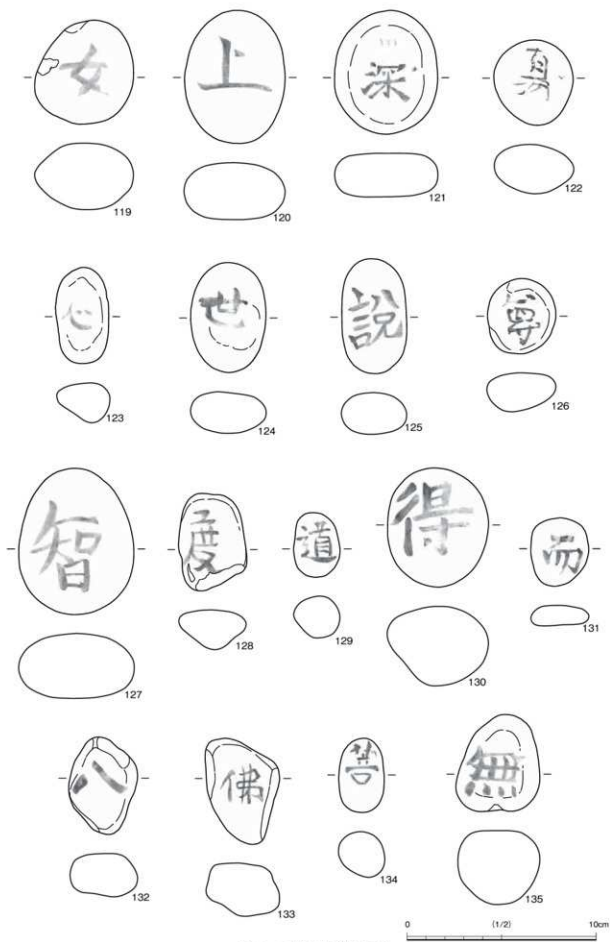


图20 D地区採集硃石(2)

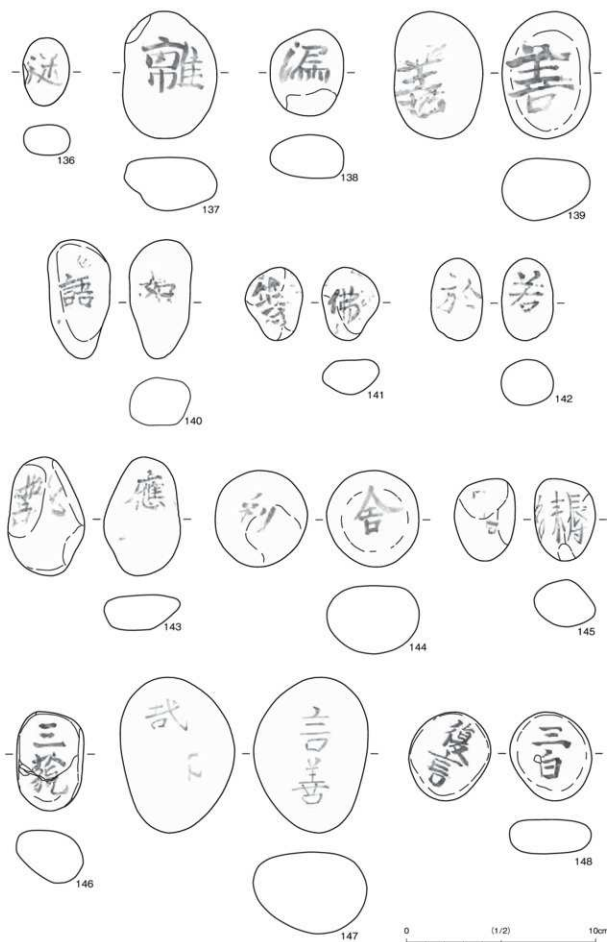


图21 D地区採集經石(3)

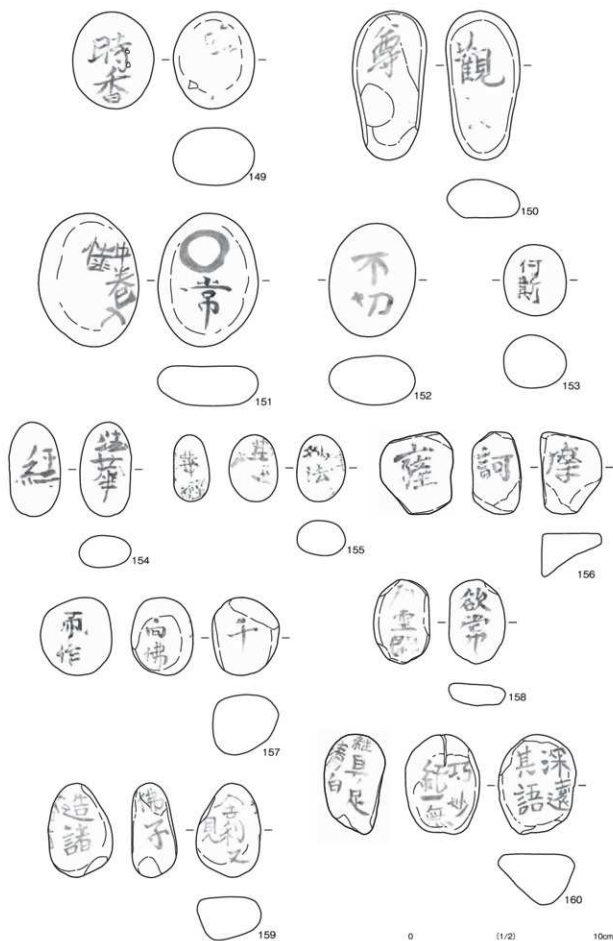


图22 D地区採集經石(4)

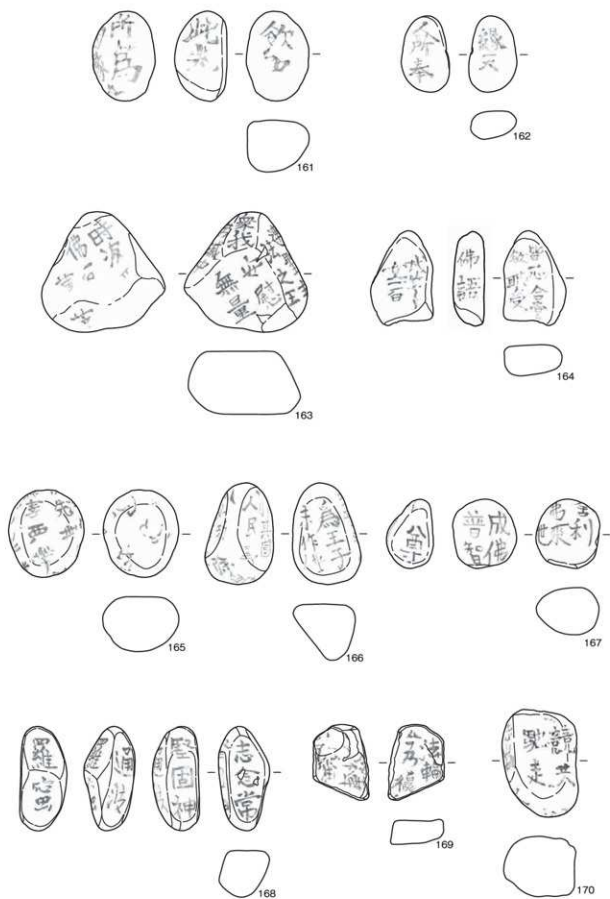


图23 D地区採集經石(5)

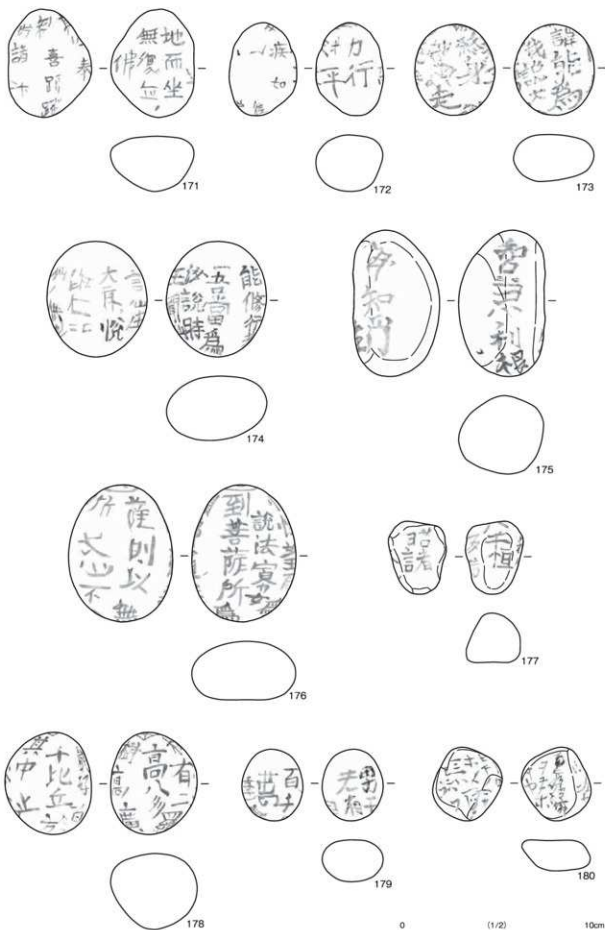


图24 D地区採集經石(6)

## 經石一覽表

遺物番号	墨書銘	面	遺物番号	墨書銘	面
101	縁	1	129	道	1
102	我	1	130	得	1
103	咸	1	131	而	1
104	下	1	132	八	1
105	慶	1	133	佛	1
106	故	1	134	菩	1
107	其	1	135	無	1
108	告	1	136	迷	1
109	薩	1	137	離	1
110	子	1	138	漏	1
111	師	1	139	善・善	2
112	若	1	140	如・語	2
113	須	1	141	佛・等	2
114	受	1	142	若・於	2
115	修	1	143	應・等?	2
116	從	1	144	舍・利?	2
117	十	1	145	麴多・羅?	2
118	除	1	146	三觀・□	2
119	女	1	147	言善・哉□	2
120	上	1	148	三白・復言	2
121	深	1	149	□□・時香	2
122	真	1	150	觀□・尊□	2
123	心	1	151	○常・中卷入儀	2
124	世	1	152	不分・□□	2
125	說	1	153	何斯・□	2
126	尊	1	154	法華・経	2
127	智	1	155	妙法・蓮・華経	3
128	度	1	156	摩・訶・薩	3

遺物番号	墨書銘	経巻名	面
157	千・向佛・而作		3
158	欲常・処空閑	妙法蓮華経序品第一	2
159	舍利又見・佛子・造諸塔廟	＊	3
160	深遠其語・巧妙純一□・雜具足清白・梵	＊	4
161	欲知・此光・所為因縁・時	＊	4
162	縁天・人所奉	＊	2
163	遠聖主法之王・安聖無量・我衆・若減度・時故□□怖□□□・普	＊	6
164	皆一心合掌欲聽受・佛語・我等千二百	妙法蓮華経方便品第二	3
165	衆□心所念種・種所行・道若・干諸欲性・先世善惡業	＊	4
166	為王子未作佛・時其國人民壽・八小劫・除為・王子未作	妙法蓮華経譬喻品第三	4
167	舍利弗來世・成佛普智・尊	＊	3
168	志念常・堅固神・通波・羅雲	＊	4
169	法輪今復・轉無上	＊	2
170	互□□□・競共馳走・争出火・宅・?・?	＊	8
171	地面坐無復□礙・其心泰歡喜・踊躍・時諸子・等	＊	5
172	力行歩平・正其・疾如□□□□從而・侍・衛之	＊	6
173	誰能為我說大・乘者吾當・終身供□走・◎使時	妙法蓮華経提婆達多品第十二	4
174	◎・能修業者吾當為汝說時王閻仙・言心生大喜・悅即便□仙人供給	＊	4
175	智慈利根・□知衆生	＊	2
176	◎・懷怖望而為說法喜女到吾處所為・問佛遺音・薩則以無所畏心不	妙法蓮華経安樂行品第十四	4
177	八・千恒・河□・□諸・善・我等	妙法蓮華経從地涌出品第十五	5
178	有二高八多羅・樹高廣・巖好百・千比丘於・其中止・園・林浴地	妙法蓮華経分別功德品第十七	7
179	男子若有□量・百千萬億衆	妙法蓮華経觀世音菩薩普門品第二十五	2
180	南無阿彌陀佛ヲトナキヤ・ヘイセント・クニカ・ホメホニニハントシワコウ		3

異体字はすべて当用漢字に修正している。

## Ⅳ まとめ

今回、椿遺跡の調査では、古代の遺物包含層、古墳時代の土坑、近世の寺院関連遺構の一部を確認することができ、当該地区の歴史を考察するうえで貴重な資料を得ることができた。最後にこうした調査成果を総括し、今後の課題について述べてみたい。

### (1) 古代の遺物について

A・B地区の遺物包含層からは、一定量の須恵器が検出された。これらの資料は型式学的に若干幅をもつものであるが、坏身の形態や環状つまみの存在などから、おおむね9世紀代に位置づけられるものと考えられる。また、点数は少ないものの、墨書が施された個体が存在することは注目される。

A・B地区では小片で図示できなかったが、緑釉陶器片も確認されており、付近に官衙的な施設が存在していた可能性もある。当初、こうした遺構の存在は、丘陵上のC地区において確認されるものと考えていたが、本編で述べたように古墳時代の遺構は認められたものの、古代の明確な遺構は検出できなかった。今後の周辺地区で調査が実施される場合は注意が必要である。萩市街周辺においては「延喜式」に古代の駅である「垣田」の駅名があり、現在の椿東中津江周辺に比定されているが、今回の調査成果により、新たに官衙関連施設が椿地区に存在する可能性が浮上してきたことは大きな収穫であったと言える。

### (2) 採集経石について

経石がまとめて採集されたのは福昌寺境内地跡にあたり、この寺は『防長社寺由来』によると、萩山田村にあった白山水福昌寺を剣舟和尚が山号を万年山と改め、臨済宗妙心寺派の寺として椿西分村に再興したものである。この由緒は文元六年(1741)二月九日に書かれており、その翌年に作成された萩藩主の御国廻りの道筋を描いた『御国廻御行程記』にも「禅宗福昌寺」の名が見られる(図25)。

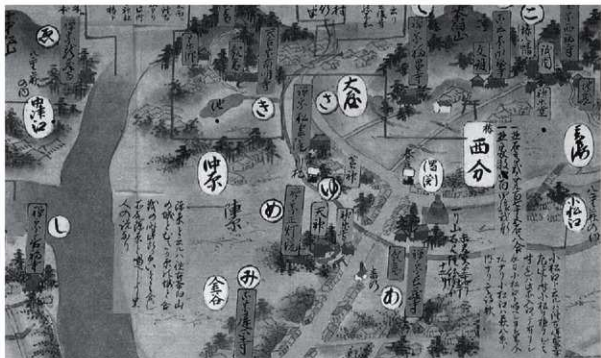


図25 椿周辺と「禅宗福昌寺」(「絵図でみる防長の町と村」より転載)



また、弘化2年(1845)に書かれた『防長風土注進案』には、本堂が長屋造りで、東西八間南北五間、角柱で屋根は瓦葺きであったとある。しかし、それ以後の記録は残されておらず、廃寺の時期も不明である。

この地に墨書のある礫石(以下経石という)が散布していることは、昭和24年頃に萩市の郷土史家である山本勉弥氏によって確認されていた。当時、経石の埋納目的等を記した碑文はすでに無くなっていたと記録されている。また、採集した経石の中に「南無阿弥陀仏文化五辰年四月廿一日」と書かれた石が発見されている<sup>(1)</sup>。

昭和の中頃、経石を家の四隅に埋めると厄除けになるとの風評がたち、多くの経石が掘り出された。この際、全ての経石が持ち去られたと思われるが、昨年5月、今回D地区とした範囲で経石の発見があったため、遺構および散布範囲確認の試掘調査をおこなった。その結果、経石が集積する箇所が確認され、その周囲約2mの範囲で経石が散漫に分布していることも判明した。

こうした経石は県内でも数例出土しており、宇部市厚東区棚井の東隆寺では元禄年間(17世紀末～18世紀初頭)に造営された蔵骨器を伴う一字一石経塚が発掘調査され<sup>(2)</sup>、長門市油谷町浅井の旧井上家屋敷跡では天保10年(1839)に造営された一字一石供養塔が発掘調査されている<sup>(3)</sup>。萩市内においても寛政2年(1790)に書かれた金谷天満宮の造営日記に「長藏寺隠居が米俵3俵分の小石に法華経を書き写す」という記事<sup>(4)</sup>が残っており、明治時代まで社殿の床下にその経石があったという<sup>(5)</sup>。さらに大照院鐘樓門の基壇土からは、約1000個の多字一石経が出土している。大照院は延享4年(1747)に全焼し、その翌年から再建を開始しているが、出土した経石は鐘樓門を再建する際に除災・鎮火・地鎮を目的として埋納されたものと考えられる<sup>(6)</sup>。また、北古萩の海潮寺には、文政6年(1823)に経石を埋納した供養塔が造営されており、その他にも南明寺下寺の道路脇には、慶應4年(1868)に造営された祈願成就塔がある<sup>(7)</sup>。以上のような事例から判断すると、社寺建造物の地下には地鎮を目的として埋納し、寺院境内では供養や祈願を目的として埋納していることがわかる。よって福昌寺境内地跡から出土した経石も何らかの供養あるいは祈願を目的として埋納された可能性が高い。

(参考文献) (1)・(5)・(7) 山本勉弥「萩に於ける経石」『萩附近の史実』1951

(2) 宇部市教育委員会「東隆寺一字一石経塚」1988

(3) 油谷町教育委員会「浅井経塚」1991

(4) 萩市郷土博物館叢書 第4集『金谷天満宮造営日記』1995

(6) 萩市歴史まちづくり部文化財保護課「発見された大照院鐘樓門出土経石」2008

## 图 版



調査区遠景（南東から）



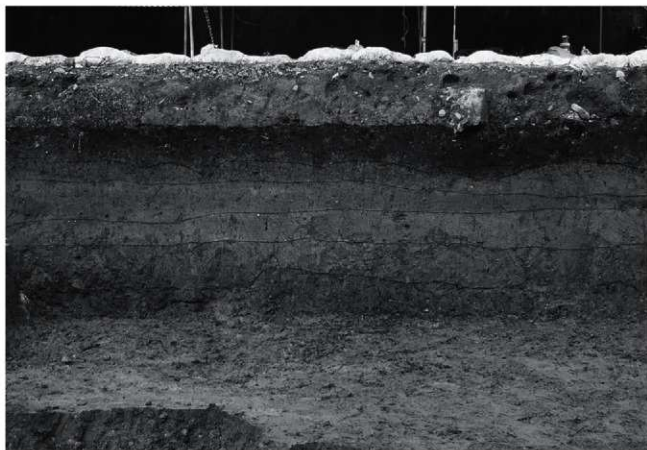
A地区完掘状況（東から）



B地区土層ベルト設置状況（東から）



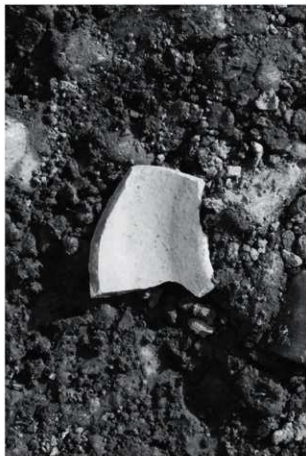
B地区トレンチ東壁土層断面（西から）



B地区南壁土層断面（北から）



B地区土器出土状況① (西から)



B地区土器出土状況② (北から)



B地区土器出土状況③ (西から)



B地区土器出土状況④ (西から)



B地区土器出土状況⑤ (西から)



B地区土器出土状況⑥ (西から)



B地区土器出土状況⑦ (北東から)



B地区土器出土状況⑧ (北から)



B地区完掘状況①（東から）



B地区完掘状況②（西から）

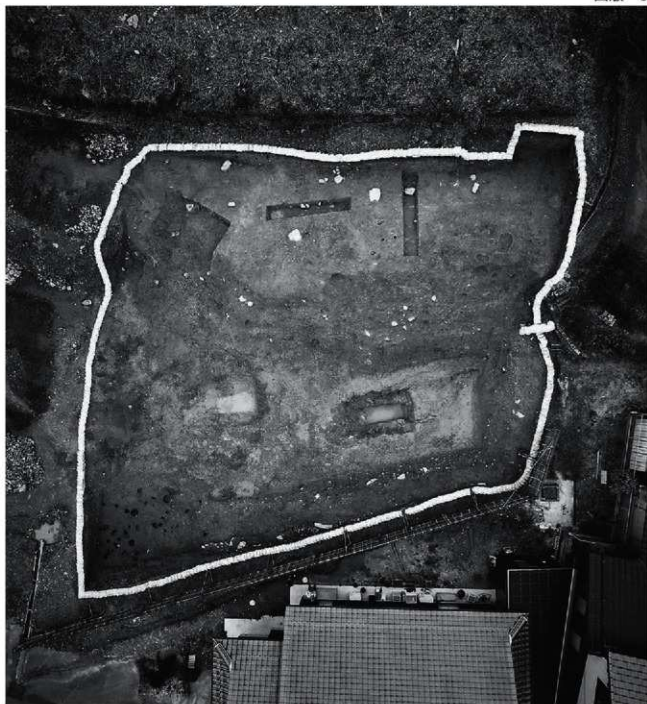




C地区遠景（東から）



C地区近景（東から）



C地区全景（北から）



C地区北東部 (北から)



C地区近景 (北東から)



C地区遺構密集地区（南から）



C地区東壁土層断面（西から）



C地区SK2土器出土状況（南から）



C地区SK2完掘状況（南から）



C地区SK1完掘状況（南から）



C地区丘陵部完掘状況（西から）



D地区全景（西から）





D地区近景（北から）



D地区南西部（北から）



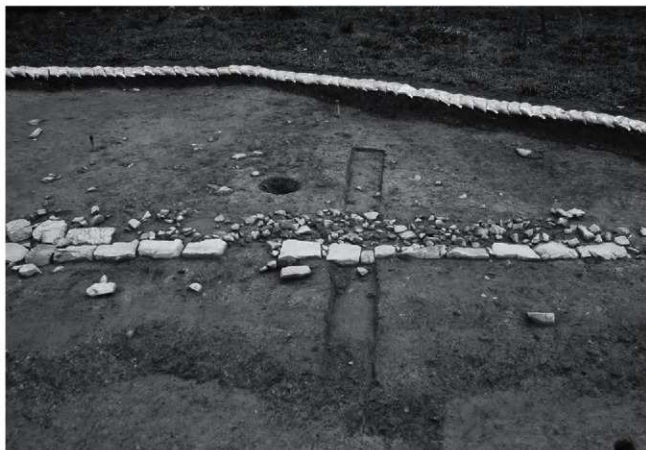
D地区土器出土状況（北から）



D地区瓦溜り1遺物出土状況（南から）



D地区瓦溜り2遺物出土状況（南から）

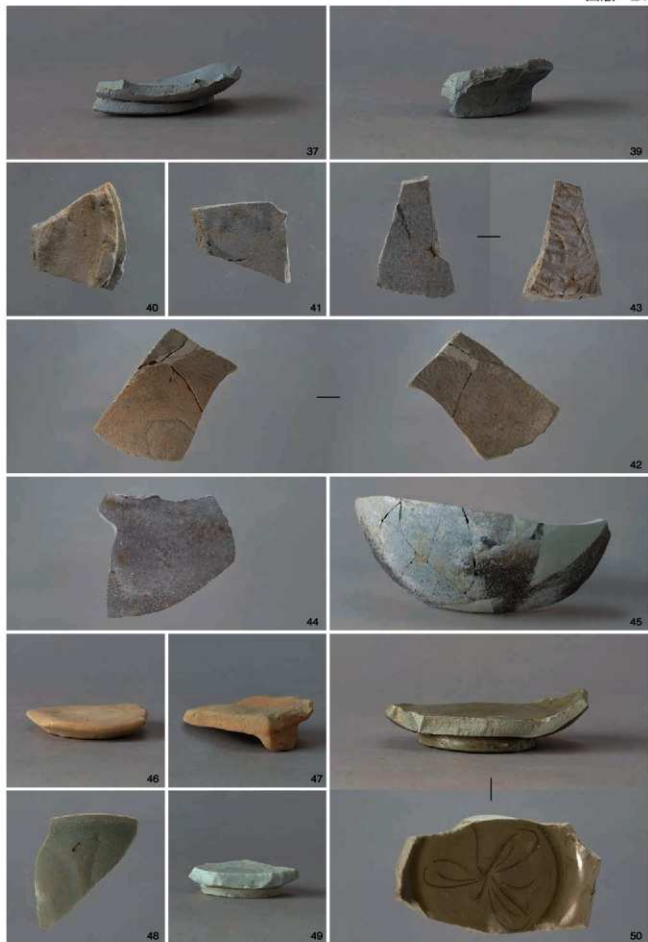


D地区近世石列検出状況（北から）









出土遺物④









85



86



87



88



89



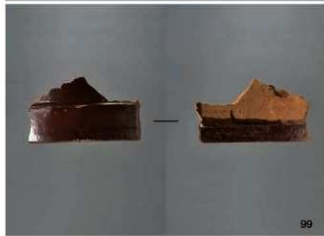
90



91



92



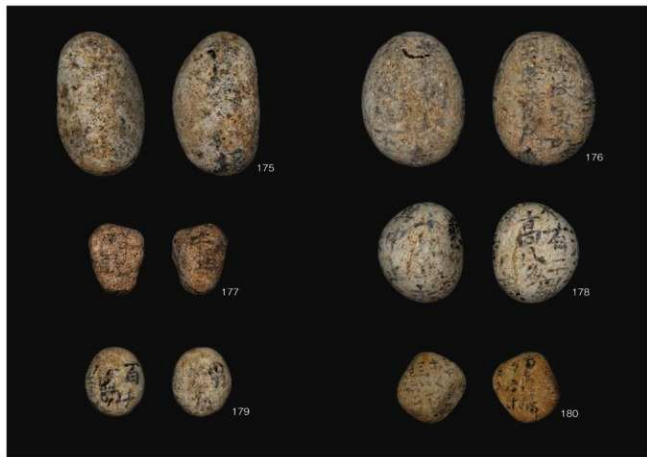


採集經石①

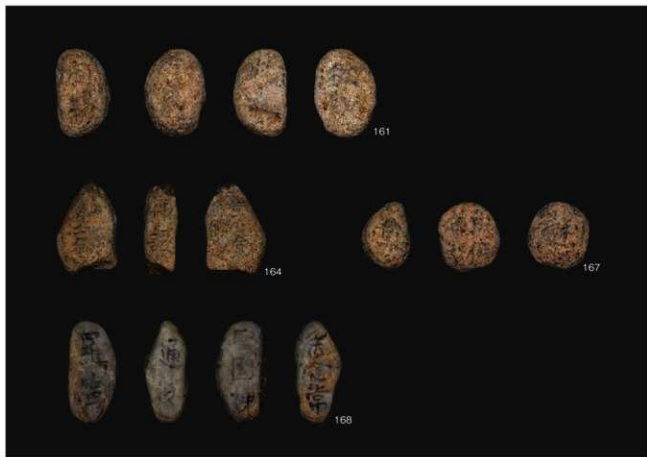


採集經石②





採集經石④





## 報告書抄録

ふりがな	つばきいせき
書名	椿遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第72集
編集著者名	小南裕一 高木英明 山田圭子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL: 083-923-1060
発行年月日	西暦2010年3月23日(平成22年3月23日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つばきいせき 椿遺跡	山口県 萩市 大字椿	35204		34° 23' 23"	131° 23' 59"	20090421 ～ 20091216	2,530	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
椿遺跡	集落跡	古代 中世	土坑 柱穴	2基 30個	弥生土器 須恵器 土師器 陶磁器 金属器 瓦質土器 土製品 石製品	遺物包含層から古代の須恵器が出土し、墨書が確認できるものも存在する。
	寺院跡	近世	石列 瓦溜り		瓦 経石	大量の経石が採集された。

要約	<p>椿遺跡は萩市椿に所在する、弥生時代から近世にかけての遺跡である。遺物包含層からは主として古代の須恵器が出土し、墨書が確認できるものもあることから、近辺に官衙等が所在した可能性も指摘できる。C地区では、土坑・柱穴の密集した区域から、土師器・陶磁器等、古墳時代から中世にかけての遺物が検出された。</p> <p>17世紀後半に造営された福昌寺の関連施設が置かれていたと考えられるD地区では、建物基礎と考えられる石列が検出され、近世瓦もまとめて出土した。経石は、文化5年(1808年)に埋納されたものと考えられ、試掘調査時に727個採集され、本調査では10点出土した。</p>
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第72集

## 椿遺跡

2010年3月

編集・発行 財団法人山口県ひとつくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 大村印刷株式会社  
〒747-0849 山口県防府市西仁井令1-21-55